

宇和島行

上田 博

ここ一、二年は、先生の書齋に上げていただいて、三十分、一時間とまとまってお話を聞く機会を持たなかった。このころ先生は、長い応接にお疲れのように感じられたからである。それで自然と、月に一回程度、「仕事の合間ですから」との口実で、玄関口で立ったまま五分、十分と先生のお顔を見るにとどめていたのである。

六月十九日はポトナムの全国大会が甲府で開かれることになっていた。何年か前、ぼくは甲府から身延線で太平洋の方へ旅をしたおりに、富士山が車窓の右に左にとかくれんぼうをするようで、とても楽しい旅でした、とお話した。乗り物大好きな先生は、ずいぶん遠くなられた耳を傾けて、ぼくの話の話を聞かれた。あのよう遠いところへ行かれることを案じて、ぼくは六月十六日の日、いつものように玄関口に立ったのである。「静岡まで地元の実行委員の人が迎えに来てくれるから」と言われたが、先生の顔色はいつになく悪くて心配が増した。先生のお姿を見た、これが最後になった。

想えば四十年のながい間ご指導を受けた。高校の教員生活に疲れ果てていた三十代の十年間、先生の書齋は、ぼくに残された唯

一のアアシスであった。仕事を終え、家で食事をすませて、八時頃に先生をお訪ねする。九時か九時半頃まで、専ら明治文学のいろいろな問題についてご質問をし、先生がいてねいに答えて下さる。今想えば、これほどせいたく極まりない個人ゼミナールはなかったと思う。月に一、二回、先生の夜分のいちばん大切な時間を、不肖の弟子のために割いて下さっていたのだ。

先生は七十代の終わりにご病気になられた。手当てが適当ですぐに元気を回復された。八十歳になられたとき、先生は政治小説研究で残された「末広鉄腸」論をまとめるために、出身地である愛媛県宇和島への調査旅行を企画された。何のきっかけであったか、ぼくは同行を願い出た。一泊二日の宇和島行が、こうして実現した。

新幹線で岡山まで行き、岡山から宇和島まで特急に乗り継いだ。六時間はたっぷりかかる長旅になった。ぼくはこの時まで、宇和島は瀬戸内海の島の一つだと思いついでいたのだから、足手まといな同伴者と思われていたかもしれない。先生は、宇和島の宿に旅装を解くのも惜しまれて、すぐに市内バスに乗って鉄腸の墓の

ある大超寺へ出発された。バス停からかなり歩いて山腹の墓地を
目指した。先生の足どりは街中とお変わりなく、ぼくは始終先生
の後に回った。夕ぐれに近い墓域の中で、末広鉄腸の墓の前に立
たれた先生の、何とも形容しがたい安堵の表情を、鮮明に思い泛
べることができる。

翌日は市内商店街の中にある「木屋旅館」に立ち寄り、主人に
頼んで旅館所蔵の鉄腸の書、表装された幾点かを觀賞され、それ
ら全てを写真に収めておられた。いよいよ先生のライフワークの
一つであった（政治小説研究）の集大成される日も近づいたと、
ぼくはひそかに喜んだ。

先生はいつかぼくに、「君もポトナムに入つて歌を作らないか、
ぼくが見てあげるから」と言われたことがあつた。生来、抒情性
の稀薄なぼくは、先生の犬好きを念頭にして、「ぼくが歌を作る
のは、犬に猫の啼き声をしろというほど不可能なことです」と一
応はお断りして、間もなく「ポトナム」の購読会員に加えていた
だいた。月のはじめに届く「ポトナム」で、先生の新作の歌を読
むのが大きな楽しみになった。以来、歌によつて、先生の深い内
面に直にふれるという又とない機会を持つことになった。貧しい
ぼくの内面生活にとつて、先生は言葉の本来の定義として、ぼく
の生涯の唯一かけがえのない（師）であつた。

七月十六日、悲報に駆け付けた。ぼくがタクシーから降りた、
ちょうどその時、先生は白布に包まれて病院の車から降りてこら

れる時であつた。ぼくはこの偶然に、言い難く悲しい恩寵を感じ
た。「面会謝絶」の状態にある先生の病院の窓下に、何日か一人
立ちつくしたことが、現実にかうした無言のご帰宅の日とならう
とは。

ぼくはご家族のご配慮で座敷に上げてもらつて、先生の前に額
づいて、深いご恩にお礼を申し上げた。

額づきて師のご遺体に向かいおり我が身の奥に集まる嗚咽

先生。先生から親しく歌のご指導を受けたいと、今、痛切に思ひ
ます。未完のままに終わった（政治小説研究）の無念を想います。

（うえだ・ひろし 立命館大学教授）